

映画「プロミスト・ランド～サーファーたちが見たイスラエル」
小冊子「聖書で学ぶ『約束の地』」 トッド・モアヘッド著

はじめに

映画「プロミスト・ランド～サーファーが見たイスラエル」 70分

美しいイスラエルの海と自然を背景に、米国のクリスチャンサーファーと、イスラエル人サーファーたち、そしてアラブ人サーファーが交流する。

名サーファーとして世界的に知られるトム・カレン氏のイスラエル訪問も紹介される。彼らはテルアビブでサーフィンを楽しんだ後、エルサレムとガリラヤを訪れる。

最後はみんなで「過越の祭り」を祝う。

小冊子「聖書で学ぶ『約束の地』」：この映画のスタディガイドとして制作された。

なぜ、イスラエルの地は「約束の地」なのか。

聖書はイスラエルについて何を語っているのか。

なぜ、イスラエルが重要なのか。

このような疑問を、わかりやすく学べるように構成されている。

イスラエル民族は、神がご自身の民として選び、またご自身の「瞳」と呼んで愛しておられる民である。彼らについて、クリスチャンが知っておくべきことが、この小冊子には簡潔にまとめられている。

これまで多くのキリスト教会で誤って教えられてきたことは、次のこと

教会は「霊的なイスラエル」である。

イスラエル民族は、神の選びの民としての使命に失敗した。

その地位は、教会が引き継いだ。

よって、旧約聖書に約束された祝福は、現代ではイスラエル民族ではなく、教会のもの。

みやま集会では、教会がこのような誤った教えにそれていったのは、どういう経緯だったのか、という質問が出ました。

そこで、この映画と小冊子を通して、この疑問について学ぶことにしました。

その内容は全体で3回シリーズ、第1回は映画を視聴し、第2回と第3回は、この小冊子の中から、第2章「神のご計画と現代イスラエル」と第5章「教会はどこで間違ったのか」を扱うこととしました。

本日は、第3回「教会はどこで間違ったのか」です。小冊子では、歴史的背景と聖書解釈の変化（比喩的解釈）を取り上げています。

本日のみやま集会では、小冊子の内容をそのまま学ぶのではなく、その底流にあるものを聖書から学びます。

地上の教会は間違ふことになるよと預言されていた

1. 天の御国の奥義 (マタ 13 : 11~12)
 - (1) 4種類の人々がいる (マタ 13 : 3~9、18~23)
 - (2) 敵 (=サタン) が来て麦の中に毒麦を蒔く (マタ 13 : 24~30、36~43)
 - (3) 大きくなるが、空の鳥 (=悪霊) が来て、その枝に巣を作る (マタ 13 : 31~32)
 - (4) パン種 (=偽りの教え) が全体をふくらませる (マタ 13 : 33~35)
 - (5) その中に、真の信者は存在するが、隠されたままである (マタ 13 : 44~46)
 - (6) 地引網のように良いものも悪いものも入っている (マタ 13 : 47~49)
 - (7) えり分けるのは、世の終わりである (マタ 13 : 49~50)
2. 教会の指導層
 - (1) 「忠実な賢い管理人」と「不忠実なしもべ」(ルカ 12 : 39~48)
 - ① ルカ 12 : 46 不忠実な者ども = 不信仰者、同じ目に合わせる = 火の池の裁き
 - (2) 「良いしもべ」と「悪いしもべ」(ルカ 19 : 11~28)

サタンの最重要攻撃目標は、イスラエルである

1. メシア再臨の条件
 - (1) ホセア 5 : 15
 - ① 自分の罪 = レビ 26 : 40~42
 - (2) マタイ 23 : 39
2. サタンによるイスラエル攻撃
 - (1) 黙 12 : 7~17
 - ① 全世界を惑わす (12 : 9) . . . 反ユダヤ主義

サタンの策略 4つの健全な聖書理解を教会から奪う

1. 異邦人の救い
 - (1) 子どもたち (=ユダヤ人) のパン (→ユダヤ人に与えられたもの)。小犬 (=異邦人) は食卓から落ちたパンくずをいただく (マタ 15 : 22~28)
 - (2) 百人隊長のしもべの癒し (ルカ 7 : 1~10)、異邦人の謙遜 (6~7節)
 - (3) 人々が東からも西からも、また南からも北からも (ルカ 13 : 29~30)
 - ① 今しんがりの者 (=異邦人)、いま先頭の者 (=ユダヤ人)
 - (4) 救いはユダヤ人から出て、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来る (ヨハネ 4 : 21~24)
 - (5) 異邦人信者の立場 (ロマ 11 : 11~24)
 - ① アブラハム契約に基づいて形成された民族であるイスラエルは、たとえて言うくと、神によって栽培されたオリーブの木
 - 木の幹はアブラハム契約
 - 根の豊かな成分は神の愛、神のいつくしみ

- その枝はイスラエル

- ② その枝の中のあるものが不信仰によって折られて、野生種のオリーブである異邦人がその枝に混じってつがれ、オリーブの根の豊かな養分を^{とも}に受ける。

2. ユダヤ人の位置

- (1) 神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます (マタイ 21 : 43)
 - ① 国民(民族) = 単数形。教会はいろいろな国、いろいろな民族の人々から構成されるので、この箇所「国民(民族)」は、教会ではない。
 - ② あなたがた = イエスを拒否した世代のユダヤ人たち。ただし、その世代の中にも、個人的にイエスをメシアとして受け入れ、救いを受ける人々はある。
 - ③ 国民 = 将来、イエスをメシアとして受け入れ、民族的救いを受ける世代のユダヤ人たち。この時は、一人残らず全員が救われるので「神の国の実を結ぶ国民」と呼ばれる。
- (2) ユダヤ人たちがつまづいたのは倒れるためではない。・・・イスラエル人の一部がかたくなになったのは、異邦人の完成のなる時までであり、こうしてイスラエルはみな救われる、・・・選びによれば、父祖たちのゆえに愛されている者である。神の賜物と召命とは変わることがない (ロマ 11 : 11~29)

3. 教会とその土台

- (1) あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、教会を建てます (マタ 16 : 18)
- (2) 教会とは何か
 - ① ユダヤ人と異邦人、両者が一つのからだとなった「新しいひとりの人」 (エペソ 2 : 11~19)
 - ② この教会は、キリストのからだ (エペソ 1 : 23)。キリストはそのからだである教会のかしら (コロ 1 : 18)
 - ③ 異邦人もまた共同の相続人となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となる (エペソ 3 : 6)
 - ④ これは、キリストの奥義と呼ばれる (エペソ 3 : 4~5)
- (3) その土台は何か (エペソ 2 : 20)
 - ① 使徒と預言者 (新約時代の預言者、黙示録で完了)
 - ② キリストご自身はその礎石
- (4) 土台としての使徒
 - ① 十二使徒 = イエスの公生涯において行動を共にしたこと (使徒 1 : 21~22)
 - ② 十二使徒以外の使徒 = イエスの復活の証人 (使徒 1 : 22)
 - 主の弟ヤコブ (I コリ 15 : 7、ガラ 1 : 19、2 : 9)
 - サウロ (パウロ) (使徒 9 : 1~16、I コリ 9 : 1、15 : 8~9)
 - バルナバ (I コリ 9 : 6)
- (5) 使徒の使命

- ① 「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストによって、歩きなさい。」(使徒 3 : 6)
- ② 「なぜ、私たちが自分の力とか信仰深さによって彼を歩かせたかのように、私たちを見つめるのですか。・・・このイエスの御名が、その御名を信じる信仰のゆえに、この人を強くしたのです。」(使徒 3 : 12~16)
- ③ 私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」(使徒 4 : 20)
- ④ 使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出ていった。そして、毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。(使徒 5 : 41~42)
- (6) 聖徒にひとたび伝えられた信仰 (ユダ 3、17)
4. 教会の権威の限界
- (1) 教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人か取税人のように扱いなさい。(マタ 18 : 17)
- ① 異邦人か取税人のように扱うとは、教会の交わりから外すということ
- ② マタ 18 : 15~35 教会による信者の懲戒の手順とその中核にある教え (心から兄弟を赦す)
- ③ 20 節の「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいる」とは、16 節の懲戒ステップの正当性をイエスご自身が保証してくださるという約束。
- (2) 信者の肉体の死はメシアが決める。しかし、教会の交わりから信者が離れると、その人の肉体の死を決める権限は、サタンの手に戻る (I コリ 5 : 4~5)
- (3) アナニヤ・サツピラ事件 (使徒 5 : 1~11) は、マタ 18 : 15~17 の手順によっていないが、ペテロの使徒の権威による。現在は、使徒はいないので、こういうことは起きない。
- ◇ 「異邦人の救い」に関する正しい理解を失って、教会はユダヤ人に対して傲慢になった
- ◇ 「ユダヤ人の位置」に関する正しい理解を失って、『イスラエルはその歴史的役割を終えた』、さらには『キリストを殺した呪われた民族だ』という偏見を持った。
- ◇ 「教会とその土台」に関する正しい理解を失って、使徒たちの教えが語られなくなった。
- 比喩的解釈、理性的に納得できる解釈、聴衆が喜ぶ、感動する説教がもてはやされるようになった。
- ローマ帝国でキリスト教が公認され、聖職者には税金や兵役が免除されると、信者ではない者たちが教会に所属し、彼らが多数を占めるようになった。金銀はあっても、御名を信じる信仰はない。自分の力や信仰深さを重んじる、まったく逆の方向へ、地上の教会は向かっていった。
- ◇ 「教会の権威の限界」に関する正しい理解を失って、宗教裁判や処刑が行われた。そして、ユダヤ人を殺しても良心のとがめがなくなった。